

中  
勘  
助

氷  
を  
割  
る





氷を割る



昭和十五年五月三十一日

断片。姉の病気は蜘蛛膜<sup>くもまく</sup>下の溢血<sup>いっけつ</sup>と診断された。三週間安静にしておいてみなければわからないが非常に再発しやすいから注意を要するとのこと。子供みたいな顔をしてすやすやと眠りつづけている。

二十六日の午後だった。準備をおわったままのびのびになつてた「鳩の話」を書こうと思つて机にむかつたところへ杏奴<sup>あんぬ</sup>さんが桃子ちゃんをつれて遊びにきた。私は

ちよつと挨拶をしてから草稿をかたづけ、ペンをしまい、ちらばった参考書を積み重ねた。銀座の帰りとかで、桃子ちゃんがはじめて買ってもらったおもちやの鉄砲をもつてはしやぎまわるのを姉もあがつてきて元気よく相手をしてたが、そのうちおりていったなりいつまでも姿をみせない。様子を見にいった杏奴さんが戻ってきて

「気分でもお悪いんじゃないかしら。縁側につつぶしてらっしゃる」

といった。行ってみたら座敷のまえにのめっている。こちらのいうことはいくらか通じるらしいけれど目をとじ

たなりうけ答えをしない。で、杏奴さんと××に床をと  
ってもらい、私が両腋りようわきを抱えあげるようにして寝かせ  
た。それがこんな病気とは思わなかった。溢血も三代つ  
づけて見たし、姉の家のほうにその筋のあることも知っ  
てるし、去年の春頃眼底出血をやったときにもそのほう  
の注意はされたのに気がつかないのはしようのないもの  
である。ひとつにはふだんから病気となると目をつぶっ  
て黙りこむ癖があるためにそんな油断もしたのだ。そう  
いえば最近にも訳のわからぬことで一週間ばかり床につ  
いたことがあった。

夜。××が看護するというのを おまいは昼働くのだから といつて着物のうえへたんぜんをかけたまま私がそばにごろ寝をする。そんなことが三日三晩つづいた。

## 宿命か

げに宿命か

三十年の月日を

半痴半狂の人のみとりに

身心ともに病み疲れて

朽木くちきのごとく倒れし人



その比たぐいなき善良さを思い

いいようもなき不幸の一生を思い

わが更生の恩をおもい

家運挽回の恩をおもい

ながしにぼとぼと涙を落しながら

夜ふけの厨くりやに

かちかちと氷をわる

断片。発病の日の一日二日まえのことだった。姉は忘れたように遠ざかってた絵筆をとって杏奴さんがもって

きてくれた真紅なばらを写生した。そしてちようどかきあげたところへ縁側を通りかかった私に あんまり出来がよくない といった。私は先から私の詩を絵にしておいてと何遍となく頼んだのだけれどいつぞやの肺炎のとき同時に神経麻痺をやってからはとかくおつくうがつて、殊に去年の眼底出血の後にはまったく絵筆をとらなかつたのだが。

断片。ここへこしてきてから姉は永年朝顔をつくる。八十八夜に蒔<sup>ま</sup>くと末になつていつぺんに庭の花がなくな

るからといって私の誕生日の五月二十二日に蒔くことにしている。ことしも自分で種を買ってきたのが二鉢ばかり芽を出した。名まえを書いてさした木札も思い出となるであろうか。

断片。姉の机のうえをふと見たら杏奴さんからきたあねさんだよりのこけしと小さな鳥の羽根がのっていた。こけしは井の字がすりの群青色の著物きものをきて、唐人髷とうじんまげにきいている。羽根は庭の掃除をするときにでも拾ったのだらう。こんなものを大事そうにとっておいたりするの

も昔ながらの性質である。

断片。三十数年前、姉がまだ健康でいた兄と福岡に住み、私が東大の学生だったじぶんの話である。私はおりおり姉のさとへ遊びにいった。ある時何かの事の序ついでに姉の父が、若い者たちに雷のように怖がられてたあの父が人一倍大きな目に涙をためて私に 姉さんを頼む といった。よくよくのことだったろうと思う。私はなんといったかおぼえていない。が、なんともいいようのない気もちだったにちがいない。怒ると雷みたいに怖かった

が、またひどく涙もろい父でもあった。姉は父の秘蔵つ子だったらしい。姉の父は間もなく亡くなった。その後私が卒業して病後の保養——というよりは家を出て小田原にある姉のさととの別荘へ厄介になった時のことである。姉の母は顔色をなくして心配した。そうして どうぞ姉さんのために家へ帰ってくれんか と両手をついて頼まれた。私はきかなかつた。ききようがなかつたのだ。その母も間もなくなつた。それから私たちは互に杖つえとも柱ともなつて苦惱の三十年を過してきたのである。

断片。私が出たあとひとりまっ暗な家庭を背負つて半痴半狂の兄と訳もわからずに僻<sup>ひが</sup>みぬいた年寄との世話をしながら無経験な女の細腕に一家を支えつづけた姉、狂暴になつた兄に追われて家じゅう逃げまわつた姉、髪をつかみひきずられて座敷じゅうを這<sup>は</sup>いまわつた姉、そんな場合のただひとりの庇護者であつた私がいらないため魂がぬけたみたいになり、時たまとぼとぼと私の寓居へ訪ねてきてあれこれと訴え泣いた姉、そうした家庭的業苦のうえに不治の病苦にまで悩まされとおした姉、ある時は打たれて腫<sup>は</sup>れあがつた体の紫斑<sup>しはん</sup>や爪痕をみせ声を

噛み殺して泣いたこともあった。また兄について外出した折に電車の乗換切符をもらおうとしたため帯をもって引廻され往来で人だかりがしたといつて身をふるわせて泣いたこともあった。感謝のかわりに侮辱と暴行。同情のかわりに猜疑さいぎと嫉妬。姉は身心病み疲れていくたびか死を思いつつもひとり十年それを堪え忍んだ。人びとは彼らの痴愚と邪悪のためにこの善良な人の一生を鱈なますのように切りこまざいてしまった。姉の生活は将来に些いささかの光明もない暗黒汚濁の連続であった。生きがいもない忍苦の堆積であった。これを徒いたずらに心なき宿命、ま

た凡夫の凡情の生み出すしかたのない結果として看過してはならない。これはひとつにはまさしく旧来の家族制度とその道德の悪むべき所産である。そこにはいわゆる尊族長上に道德上の義務がないばかりかむしろ不道德的特権さえがある。これは制度ではなくして陋習ろうしゅうである。道德ではなくして罪悪である。

断片。小石川の家でのことである。毎朝私が床の中でまじまじしてると——私は玄関のわきの六畳に寝ていた。——門からずっと敷いてある御影石の道にからころ



と下駄の音がする。二、三日はべつに気にもとめなかつたが時刻が時刻なり、いつもきままってそうなので不思議に思つてある日姉にきいた。姉は顔を赤くした。姉は兄と私の不和がなおるようにと氏神の八幡様へ日参をしてるのだつた。それをきいて私は胸一杯になつたであらう。けれどもあるいは浅はかな解釈により、あるいは善意の修飾をくわえて吹聴されたように私たちの不和は気質の相違や思想の対立からなどという訳のものではなく、実は底の底において兄の性格の極端な女性的欠陥からくる私の存在に対する憎悪にもとづくものであるため、私の

記憶の遡り得るかぎりの時から幾十年、あらゆる機会、あらゆる事物に絡んで手をかえ品をかえ、姿をかえ形をかえて現れる邪念はいかに姉の誠心こめた祈願をもつてしてもたやすくその場に浄められ直くされることはできなかった。そうしてそのためにこそ姉までもが生きて屍しかばねとなるような苦悩にも陥ることになったのである。

断片。盤石ばんじやくのごとく落ちかかる家庭苦人生苦に押しひしがれながらその苦悩を軽減するとき何らの具体的な処置も慰藉いしやくの方法も講ぜられることなく、白眼冷視の

うちに癲狂院てんきやういんの看護人と養老院の保姆ほぼを兼ねたような生活を十年もつづけたのち、偶たまたま兄の頭の病気を機会に絶望的な苦諫嘆願くかんをした結果姉は辛うじて兄を反省させ私と和解させることができた。とはいえ永年の家庭の癌を除いた必死の骨折りはいっこう報いられなかったばかりか、ちようど執拗な癌の転移のように今度は一層悪性な致命的な形をとって現われて終に母の死後にまでも及んだ。私はこの深刻な経験からしてしみじみと考える。当路者にして家族制度をもつて国民組織の根幹としようとすするならば徒にそれに対して空虚な讃辞を呈すること

なく、真によい家庭人となり得るごとく各人を教化訓練し、真によい家庭が成立するごとき制度と道徳を作り上げなければならぬ。現に私が身近に見るところの家庭は世間普通の意味においては概おおもむね最も恵まれた家庭に属するけれども、そこに軽重の差こそあれ、殆んど例外なしにこの悪疾に冒されているのである。

断片。十数年前の肺炎のときにも姉はこんな風に目をつぶったなり随分永く病みつづけた。私がたまたまほかの用事で平塚から上京した際のことだったか、それとも

そのため、上京したのだったか、病兄のほか、にむずかしい年寄もいたし、そこへ十六ぐらいの女中さんひとり、ほとほと困った。はじめは気がつかなかったが、姉はいつのまにか半身がきかなくなつて、寝返りができなかつた。で、看護婦さんのいないときや手のあけられないときには、私がしずかに抱えあげて、寝返りをさせなければならなかつた。かなり力があるので、ほかの者にはできない。そんな場合、姉は自分で自分を力づけるように、また私を安心させるように、つとめて元気らしいいかたで、よくなるよ、よくなるよ、といつた。よくなるとも、よくな

るとも そんなことをいって私も調子をあわせた。姉は自分が死んだらあとは闇だというような気もちでいっばいだったらしい。私はその病床のそばに坐り、ちようどこの床柱によりかかって声を殺して泣いた。

目をとじたままの姉はそれを知らなかった。姉はむしろそれなり死んでしまったほうがらくであろうが、幾十年の艱難<sup>かんなん</sup>辛苦、闇から闇の一生を火の消えるように空しく終らせることにはどうにもならぬ心苦しき悲しさを覚えてたのである。まったく姉に死なれてはあとに残る痴呆<sup>ろうもう</sup>と老耄<sup>ろうもう</sup>と無知と邪悪の集団はどうなるか知れたものでは

なかつた。しかし幸にして、実に我々にとって幸にして姉はよくなつた。よくはなつたけれども麻痺があとに残つて身心ともに目にみえて衰え、あれやこれやと間違いやもの忘れをすることが多くなつた。そしてそのため私が癩癩をおこしたりすると

「頭が悪くなつたのだから宥ゆるしてください」  
と力なく訴えて詫びるのだった。私は小言をいったあとでいつも ああすまなかつた と心から後悔した。

その後盲腸炎をやつたときにはさほど気を落さなかつた姉も昨年目をわずらい、しかもそれが頭のほうからく

るらしいといわれてからは口にこそ出さなかつたけれども  
すっかり観念した様子がみえて、いつも死ということ  
を考え、かたみの話などいいだすことさえあつた。可哀想な  
人！ 生涯苦勞しぬいたあげく病み疲れて死んでゆく。

両方の目がつぶれるかもしれないという宣告をうけて  
治療をつづけてた姉は茶の間で私とすることにつながり  
のあるあと先の話をしてるうちに幾日もこらえにこらえ  
た悲しみが終つひに押えきれなくなつたらしく

「目くらになつたらみじめなものねー」  
といつてひーと泣いた。私はなんと慰めようもなかつた。



せめて三年でもしずかな余生を送らせたいとの念願だったものを。

姉は母親譲りで人一倍寒さに弱かった。殊に年もとり健康も衰えてからはそれがひしひしと骨身にこたえるのだった。ところが生憎あいにくなことにこの家には二階のほかの日あたりのいい部屋がない。で、いつかは適当な家を買うなり建てるなりしようと言癖のようにいいながらも厄介な事情や時世のためそのままになってるのだが、言語に絶した永年の苦勞に報ゆるただそれだけのことすらできぬうちに死んでしまわれてはと思うのである。

おりおり私が神経をいらだたせて姉にあたったりすると姉は

「ふたりともいくら生きてって先がしれてるんだから仲よく暮しましようよ」

としみじみと生きている。私は返す言葉もなくて詫びいってしまふのである。またどちらが先に死ぬだろうという話が出ると姉は自分が死んでは後で私がどんなにか困るだろう　といって　どうでも後になりたい　という。私は私で同じ理由から　自分が後に残りたい　という。後先は全く天命ながら、出来ることならどうぞ順序よく

あれかしと願うばかりである。

断片。けさみれば朝顔の貝われが三鉢にも出ている、姉の愛撫を待つかのよう。もう一度この花を見せてやりたいものだ。もう一度この花を見るようになってほしいものだ。

断片。私は知っている。実に最近まで姉は私のための兄の説諭者きようかい教誡者きようかいであつた。姉は私のいない折をぬすんでは懇々こんこんと兄を諫いさめた。五十年をとおして死にきらな

い蛇のように頭をもたげてくる敵意、我執、邪念を押えるために畢生ひっせいの力をつくしたあげく今や辛うじてそれに成功してわずかに前途に光明を認めた折もあり、あたかも為すべき仕事をしおおせた蜜蜂のように寿命をおえてしまふのであろうか。私の家のこの無惨な人柱はまさにうくべき感謝も同情もうけることなく埋められてゆくのである。

断片。先頃こみや小宮から 今度の家は広くて庭もいいから一度きてくれるように と姉のところへ便りがあつた。

姉は この五月新緑の季節にゆくのだ といつてひどく  
楽しみにしていた。私の家の風として女はめったに出歩  
かない立前なので姉もこれまで保養らしい保養をしたこ  
とがなかった。しかし六年前に母がなくなつてからは私  
に留守を頼んで割合気楽に出られるようになり、旧いおふる  
友達と日歸りの遊山などするのを子供みたいに喜んだ。  
姉自身もいうようにもう先も永くはあるまいというところ  
から出来るだけ楽しませたいと思つて私も快く留守を  
するのであった。

断片。私は中継駅みたいなものだ　よくそういって私は笑った。実際私の友人は男女をとわず姉とちかづきになつたが最後皆私よりも姉のほうが好きになつてしまふ。私とは比べものにならないほど姉の方が人柄がいいのだからしかたがないし、またこの不幸な人にひとりでも味方がふえるのは私にとつてもしんから嬉しいことなのだけれども。安倍の細君もそのひとりだ。近来そこは姉の大切な休養処になつてゐるらしい。といつてもたまさか思い出したように　恭子さんのところへいつてくる　といつて出かけるぐらいのものだが、そんなときにはまる

でやどりに帰る子供みたいにいそいそと支度をするのに  
私は 恭子さんと存分私の悪口をいつてらっしやいな  
どと冗談をいいながら嬉しく眺めるのである。姉はあれ  
も話そうこれも話そうと胸に溜ったことを残らずぶちま  
けるつもりで家を出るらしいけれど恭子さんの顔をみる  
と嬉しさが先に立ってなにもかも一遍に忘れてしまいうら  
しい。帰ってくればいつも 恭子さんのところは気がおけ  
なくていい とさも満足らしくいう。気があうばかりで  
なくつきあいも旧いし、内輪の事情もお互によく知りあ  
ってるからでもある。

最近は小堀こぼりさん御夫婦と急に親しくなり、先日はじめ  
て郊外のお宅を訪問してとても歓迎されたらしく大喜び  
で帰ってきた。そして二十六日にきてくださった杏奴さ  
んと元気に話してる間の発病である。

その杏奴さんがお見舞にくだすった芍薬しやくやくが豪勢に咲  
いている。真紅と淡紅と。

断片。なおるかねー 発病後三日めか四日めにふと目  
をさましてそばにいる私にいったただひと言。



断片。しきりに舌を出すので水かときいたらうなずいた。冷やした牛乳を吸いのみでやったところ私の指を吸いのみ口のつもりでつまみながらうまそうに飲んだ。

三週間のうちの六日は過ぎた。私はくずおれてしまいうだ。

六月一日

朝。ひとりで食事をすませ、手つだいにきてくれた×子さんと交代するために病室へゆく。氷のかけをたべさせてるところだった。いれかわった私は喉へつかえはし

ないかと思ひ×子さんの手からうけとつた匙に溶けた水をすくつて雀の子みたいに口をあけてるところへつぎこんでやったら目をつぶつたまま　ううん　と子供みたいな不平をいった。六分は覚醒、四分は夢うつつらしい。今度はかけらの小さなのを入れる。ううん　という。ですこし大きなのを匙にすくい　そら大きいの　といつて舌にのせれば満足そうにむくむくしやぶっている。そのあいだにも子供の寝つくときみたいにうとうとするのが氷の冷たさのために目がさめるらしい。私たちの交渉は今や一匙の氷にちぢまってしまった。

雀の子といえは、姉が家へきていくらにもならないじぶん、小石川の家でのことである、姉は鍵あおぎりの手につきでてる自分の部屋の縁側に立って庭の青桐やかりんあおぎりの木をけげんそうに見あげていた。そんなことが幾日かつづいたあと姉はさも一大事を見つけたかのように声をひそめて私にいった。

「しっぽのない雀がくる」

雀の子に尻尾のないことを知らなかったのだ。

これも同じ頃のことだったろうか、ある日私はふと小さな三色堇さんしよくすみれの鉢を見出した。どこにどうしてかはおぼ

えていない。庭にでもおいてあったのだろう。私は家の誰かから姉がそれを買ったのだということをきいた。事の次第はこうだったらしい。姉がひとりでぼんやり門のところ立ってたところへふり売りの花屋が僅ばかりの草花の鉢を天秤でかついで通りかかった。姉はひよいとそれを買った。ただそれだけのことなのだが、それが私たち、少なくとも私をなにか愉快に微笑させた。私の家の風、私の家の者の気質にとっては来て間もない嫁さんが人目も厭わず表に立ってるというのも異常なことなら、ふり売りの花屋を呼びとめて草花を買うというものも

異常なことなのだ。それが姉の人の善さや見かけとも結びついて意外ないい感じを与えたのだろう。

実にすばらしい芍薬しやくやくの花だ。燃えたつ花びらを漸々ぜんぜんに宇宙にまでもひろげる。

断片。氷枕をかえるとき覚醒したので野菜スープをのます。はじめてだ。よく冷えている。

「さあ おいしいもの」

吸いのみを口を唇にふれたら目をつぶったまま

「なーに」

といった。

「スープ」

野菜スープはどうか知らないがスープなら好きなことを知ってるのでそういう。うまそうに二百グラムのんだ。食前の薬、食事、食後の薬、氷ひょうのう氷枕のとりかえ、そのちよつとのまだけ覚醒してあとはすやすやと眠っている。

断片。台所の木戸のひじつぼがとれたので下の町で買

わせてうちかえる。

姉は器用で小まめだった。それに永年手ひとつで家をやったため必要上からもそうになった。なにかというとき、かなづち金槌やねじまわしなど持ちだし、時には無鉄砲に難工事をやりかけたりして私に叱られた。その点私の父が自身不器用でもあり、殊に仕損じをやかましくいって迂う潤かつにものをさせなかつたところからくる私の過度の用心深さ、おっくうがりとは正反対だった。姉はそんな不向きな仕事を苦心してやったあげく塵ちりあくたのようになれると、いって愚痴をこぼした。まったくそうなのだ。自

分はやりもせず、出来もせずに姉の仕事にけちをつけたり、小言をいったりするのが家の者の悪癖だ。

## 二日

私は悲しさでいっぱいになって階段をおりた。茶の間の雨戸はあいてたが病室のほうはまだしまっていた。非常に早いのだ。私はすぐ病室へゆくつもりだったけれどゆうべ泊って看護してくれた「蟬<sup>せみ</sup>」をやすませておきたいので茶の間でこれを書きはじめた。雨がしめやかにふる。朝顔がひとつひとつ小さな声をあげて眠りつづける。



姉を呼びさまそうとするようにあとからあとへと二葉を出した。

病室の雨戸があいたのでゆく。目はとじたままだった。がわりあいはつきりしていた。食前の水薬をのまそうとしたり舌をすこし出して

「さ き に う が い」

とうわ言みたいにいった。水をいれてやる。金魚がなにかせせるときみたいに口をびくびくさせてたがわずかに首を横にして口もとからじゅーと出すのを器をあてがいながら

「そう、そう、きょうはたいへんうまくいった」と嬉しくいう。

「もういちど」

うまくやった。

「もういちど」

三度目をすませ濡れた頬を手拭てぬぐいでふいてやりながら

「よかった よかった」

となかば自分にいつてきかせる。

「なんていう病気」

「胃腸がわるい」

「ふん」

と納得する。きょうはこれだけはつきりした意識をもつて先方からものをいいかけた。

午後。書斎の長椅子でうつらうつらしてるうちにいつか眠ったとみえなにかの夢に驚いて目をさましたら障子にいったばい日がさしていた。その瞬間消えてゆく夢と入れかわりに淋しさが湧いてきた。私は手のしたをすりぬけて逃げてゆくものを捕えようとするように訳もなく跳ねおきて階段をおりた。やっとはつきり目がさめた。姉がどうかしてしまいそうな気がしたのだ。姉は消えて

なくなりもせず眠っていた。ほっとした。しつかりつかまえていなければならぬ、子供がよそへ出る母親の袂たもとをつかまえてはなさないように。

俄にわかにかき曇った空がきれいに晴れてぱーつと日がさしてきた。天地は夏に耀かがやく。

夕。茶の間で食事をしてるところへ××がきて 舌をふいてとおっしやいます。がどうしてふけば宜しいんでございましょうか ときいた。教えれば造作ないことだけれど午前中百五十グラムの野菜スープをもどした。病気のため非常にもどしやすくなっている。先刻の牛乳をま

たもどさせてはならない。で、すぐいくから　といわせ、大急ぎで飯をすます。味もなにもわからない。そういうのが本当の味かもしれんぞ　と昔せいししょうじ青松寺の和尚さんがいっていた。

病室へ行って軽くふいてやる。

「もっと」

「もうよしまししょう。またにしまししょう」

やっとききとれる舌足らずないいかたで不服をいいながら眠りに落ちてゆく。魂がすーっと遠ざかってゆくかのようにしーんと淋しくなる。

## 三日

きのうの様子ではきょうはもうすこしいいかと明るい期待をもってたのにけさの様子はちつともかわらない。というよりは幾分後退したかにみえる。私は枕もとが離れにくくなった。しかし先刻は「番茶」という新規の注文が出た。誰もいつてきかせはしないのだから自分で思いついたのにちがいない。と、そんな気休めも考えてみる。

これでよくなったところでもとの姉ではなくなるので

はないかと思う。それが堪えられない。私たちのあいだにいわば死の影法師が立ちほだかつて邪魔をするのだ。看病に気をとられてるうちに根分けもしない睡蓮の蕾が水からぬきんでていた。この花を見てくれたら嬉しいのだが。

午後。御来診。このまえよりよくなったとのこと。栄養の点さえ注意すればよくなるとのこと。一時にはぱつと明るくなる。でも見た目にはやはり昏々こんこんと眠りつづけている。

夕。看護婦さんが——時節柄人がなくて困ってたら牧

野さんのお世話でやっと見つかった。——遮光しやこうのため電  
燈のかさに白い紙を貼りつけてるので 防空演習のとき  
の黒い紙があればいいのだが と小声で立ち話をしてた  
ところだしぬけに床のうえから 納戸にある と九官  
鳥みたいなからっぽの声でいった。ちゃんときいてい  
る そういつて私は看護婦さんと目を見あわせ、納戸へ  
いってそれをさがす。棚のうえの新聞紙の包みに 防空  
演習の紙の残り と書いてあった。随分おおまかなとこ  
ろがありながらこうした整理の細かく行届くのは母親ゆ  
ずりだろう。九官鳥のひと声は私を喜びに躍らせた。



姉が病気になるまえに

庭に並べた朝顔の

素焼の鉢のあれこれに

ぽちぽちもえた貝われ葉

朝顔や

おまいたちの保ほ母ぼさんは

いまになおって目があくよ

みんな元気にのびだして

保母さんにほめられな

赤やあさぎや紫や

目ざめるように咲きそろて

保母さんを慰めな

## 六日

姉の回復の兆がみえだしたので発病の日以来筆をとらずにしまった「鳩の話」をきのうから書きはじめた。つゆ模様で日中は蒸暑むしあついし、見舞いのお客や雑用に妨げられる。で、朝四時におきる。御所ごしよの木立をどよもして日の出を迎える孔雀くじやくの歓呼がきこえる。

暫しばらく仕事をつづけるうち空腹を感じれば茶の間へお  
りて朝飯までのしのぎに有り合せのパンを一つたべ、番  
茶を焙ほうじる手間を省くためにクミスクチン——利尿剤  
——を一杯のむ。このせつのひどい番茶よりはましなく  
らいだし、脚かっけ気のためにもいいだろうと思う。

## 七日

目をあいて話すようになった。足が立ってくれればと  
思う。

## 八日

ゆうべ寝てるうちに驟雨しゅううがあつたとみえて木も土もせいせいと濡れている。睡蓮がさいた、姉の目があいたよ  
うに。

## 十日

枕もとの障子をあげさせ睡蓮の咲いたのを鏡にうつして暫く眺めていた。

十一日

看護婦さんがゆうべ眠れなかったといふのでほかの部屋で休んでもらい、私が病室の隣で「鳩の話」の草稿を作りながら看護をする。姉もほとんど眠らなかったそう  
で午前中すやすやと寝た。そのあいだにイエスの受洗の  
のちから荒野、ヨハネの囚われのあたりとらを書いた。熟睡  
ののち目をさました姉はたいへん気もちがよさそうにみ  
えた。そうしてはじめてこんなことをいった 病気にな  
ってから六日めぐらいまでは死ぬつもりでいた、花びら  
をひとひらずつとじるように。大きな花だよ と子供

みたいないいかたで。もしこれが曇った頭の錯覚でないならば、そんな気でいたとは知らなかった。そういえば、なおるかねーとたったひと言いつたのもそのあいだのことだった。

十二日

.....

十三日

朝。六時半頃××があわただしくあがってきた。なにか

と思えば鳩を手づかまえにしてきたのだった。白子鳩だ。

××は嬉しまぎれに田舎訛りいなかなまを出して 門のところを掃

除してたらおりてたからお米をやってつかまえた とう。  
う。おちついてきよとんとしている。よほど人馴れてる  
らしい。私の家は昔からよく鳥が飛込んだり、雀が泊つ  
たりする。いつかの文鳥もそうだったし、今いる十姉妹じゅうしまつ  
もそうだ。生きもののすきな××が飼いたいというの  
を騒ぎをききつけて上ってきた兄の反対でやめになる。  
あきらめきれぬ××はかきくどきながら 餌をやって放  
す といつて大事そうに抱えていった。と、今度は空手

で戻ってきて 逃げずに塀の上にいる という。かわいい鳩だった。あの種類の鳩は鳴き声がいい なぞと思う 私にも未練があるのかもしれない。

## 十五日

私は看護をかね病室の隣の居間で姉の小机に窮屈に向いながら——この机を買うまでも姉はとつおいつさんざ思案をしたらしい。自分のものを買うのにそれほど気がねをするようになっていた。引越しのとき壊れたのだったか、ここへきてから姉には机がなかった。それなり



十年もたつて母がなくなつた後姉はどこかでこの机をみてきてなにか大層悪いことでもするようになる。すこし贅沢なようだけど　とおずおずとしていいだした。あたし机がひとつほしいんだけど。私は　早くいえばいいものを　というようなことをいったらう。それまでほかのもので間に合せてたのだったか。尤も母のいるうちもつとは姉の居間もなかつたのだけけれど。――「鳩の話」を書きつづけている。塀外の街路樹の葉がくれにか、窓のまえの櫳かしの枝のしげみでか、あの鳩の声聞きこえる。いるな　と思つてひとときり書いてから玄関の格子をあけてみた。果

して塀の上にくぐまっていた、餌をくれるのを待ってるように。私は米櫃こめびつからひとつまみの米をとってきてタタキの上へばらまいた。そして敷居に腰をかけて見ている。私ともなかなかおりてこずに羽づくろいなどしている。私は口笛で鳴き声をまねてみた。と、急に首をかしげてきよときよと見まわしはじめた。私はなおも口笛をつづけながらすこしずつ米をまいた。横目で見ている。風が綿毛を逆立たせている。そのうち安心ができたのかちよつと目をそらせたすきにふわりと舞いおりた。くるつと黒い目、細い襟巻、灰褐色の外套、すんなりした姿。彼女は

おちつきはらって私のもてなしをうけている。そのくらいならばじめからひとをじらさなければいいものを。「鳩の話」も終りにちかづいてほんとうの鳩がお友達になった。

.....

## 十七日

.....

## 十八日

私が代筆した姉からの病気のしらせを見て恭子さんがみっちゃんのこしらえたプリンと花をもって見舞いにきてくれた。よくふとって元気そうだったが久しく逢わないうちにあの特徴のある目もとが目だって年をとっていった。姉は手をとって嬉しそうに迎えた。そうして帰ったあとまた手紙の代筆をさせた。お見舞がとても嬉しかったこと、みっちゃんのプリンが嬉しくおいしかったこと、花がよそからのと一風かわって桔梗ききょうと薊あざみなのが面白かったこと、またきてほしいことなど。姉は横向きに寝な

がら××に手伝わせてその花を活けた。よほど嬉しかったらしい。きょうは朝から気分が悪くてじれてたのに。

## 十九日

朝。きのうの暑さにひきかえきょうは涼しくてらくだ。姉も 気分がいい という。だけどゆうべは恭子さんのことばかり考えて寝られなかった という。

## 二十日

鳩がこない。おとといの夕がた餌をやったのだが。ひ

とにとられたか、それとももとの飼主のところへ帰ったのだろうか。きょう「鳩の話」の草稿を作りあげた私は由よしありげに彼女がこなくなつたのが淋しいのだ。

## 二十一日

ゆうべは寝るじぶんから盛んな雷雨だった。小石みたいな雨がふつた。けさ見れば睡蓮の花や鉢ものの葉が乱れ伏して蓮の葉に雫がすずしく溜っている。せいせいと冷たい。起きぬけにねまきのまま縁側をとおつて病室の障子のすきから見たら姉がぴよこんと起きていた。大層

気分がいいらしい。きのう歩く稽古をしたのできようはどうかと心配したのだ。姉は嬉しそうに笑って よくなったら明治神宮へお詣りまいにゆく という。

二十九日

.....

姉は茶の間で皆と一緒に食事をするようになった。看護婦さんは二、三日まえ、派出婦さんはけさ帰った。×は病院へ薬をとりゆき、姉は座敷で眠っている。眠ってる間が姉の極楽だ。あまり苦痛や危険を伴わないか

ぎり時どきは病氣になったほうがいいかもしれない。病氣で床についてるうちだけ家庭的業苦から解放される。兄は茶の間で昼寝をしている。これも寝てるあいだがわれひとにとっての極楽なのだ。家庭にあっては殆ど朝から晩まで自他を不快にし苦しめるよりほか出来ない因果な性格であるばかりか何事にまれ反省をして己れを改めることには屈辱を感じず。そのようにして姉には四十年が、私には五十年が、殊に兄の病氣以来の三十年の一日一日が陰惨にまっ黒に塗りつぶされた。姉の回復は嬉しいけれど回復したあげくはまたしても溝泥どぶどろの中で窒息す



るような生活をするのかと思うとなんともいいいようなない気もちになる。しかし大きな目で見れば、拳をふりあげ歯がみをして周囲を威嚇しながら自分は知らずに地獄の底をのたうちまわる兄こそ実は最も気の毒な犠牲なのである。悲しい哉、<sup>かな</sup>なくなつた母にも全く同じ性格があつた。私はここに人間の痴愚。それよりも一層制度の、因習の、律法の、道德の、不具、不純、<sup>へんぱ</sup>偏頗、低劣、酷薄、醜悪の姿を見る。

私は兄のそばで——××が帰るまで留守番をしなければならぬ。——音をたてないようにこの日記をつけて

いる。雨があがってかーっと蒸暑いつゆどきの天気になった。私は時どき足音をぬすんで病室の様子を見にゆく。薬のせいもあるのかすやすやと眠っている。まずよしと胸をなでおろして茶の間へ戻る。兄が釣のため渋紙色になった手を額にのせて眠っている。これもまずよしと思う。暫くしてまた病室へゆく。襖のすきから硯いたらぱっちり目をあいていた。襖をあけてそばへごごみながら

「気分はどう」

「とてもいい」

寝足りたのだ。まずよし　と思う。姉はいい淀よどみなが  
ら

「林檎りんごのすったのがほしいんだけれど」  
という。

「すったげましょう」

姉が

「むいただけでいい」

と遠慮するのを

「わけない」

と台所へ出て林檎をむき、塩水で洗っておろしがねでお

ろす。そこへ××が帰ってきて

「まあ そんなこと。私がいたします」と手を出そうとする。

「いいから休みなさい。暑かったろう」

とそのまま小皿一杯おろして最後に残ったかけらを我知らずひよいと口へ入れる。そして気がついてひとり笑う。魚屋が魚の料理をしながら切れはしをぺろりぺろりとやるが、なるほど栄養にもなりいちばん便利な始末のしかただと感心する。すった林檎に匙をそえて枕元へもってゆく。おいしい　おいしい　おいしい　といってするするとたべた。

まずよし　と思う。

三十日

冷えびえとしつとりしたつゆ空である。水底のように青暗い。花という花はみな散りすぎていや繁る葉ざかりの庭に白い睡蓮だけが咲いている。兄は早くから脚絆きやはんばきで綱島へ手長鰈えびに出かけ、姉は昨夜の不眠のため朝の食事もしずくに眠りつづけている。××は満洲国皇帝陛下のお通りだといっているので表へいった。そのあとに茶の間でひとり新聞をよんでる私は時どきぬき足さし足姉の様子

を見にゆく。目をさましたら食事をさせなければならぬ。姉は見にゆくたんびにむきをかえてるがやはり熟睡してゐるらしい。そのうちいよいよお通りの時刻になつて表がしんとしてきた。そこへ姉がおきてきて朝飯をたべながら ××にそういつておつけのなかへ卵をひとつ落さして という。私は顔を洗つた姉を寢間へかえして台所へゆき、まず冷たくなつた粥の土鍋をガスにかけ、戸棚から器を出して古いらんだい漆器の盆におく。そのあいだに温まつた粥をおろして汁の鍋をのせ、煮たつたところ<sup>つりかご</sup>で釣籠から卵をとつて落す。それから茶の間へかえ

って長火鉢の火をかきおこし、鉄瓶を番茶の土瓶とかけかえ、台所かられいの盆を運んで器を食卓にならべ、土鍋と汁鍋をすえ、姉を呼んできて坐らせたところへ××が帰ってきた。そしていきなりお通りの模様を話したが、まあとひとの顔をみて、どうも恐れいりました。と頭をさげた。睡眠不足をとりかえしてすっかり元気づいた姉は自分で粥をもりながら大根の味噌汁におとし卵でうまそうにたべた。

人びとはさして道徳を必要としない場合には甚だ道徳

的だが真に道德を必要とする場合にはかえってそれを放棄する。

行住坐臥ざが、一挙手一投足もおのずから修業であり、説法でありたいと思う。

七月一日

姉は朝の食卓に向いあつてる私に　ゆうべはありがとうくておいおい泣いちゃまった　といった。誰に何がというはつきりした輪郭のある気もちではなしにただなんとなく



くありがたさに充ち溢れるのだ。時どきこんなことがある。信心ぶかい母に育てられた姉は近頃事情の変化によってよほど緩和されたとはいえ、三十幾年不幸という言葉葉をこえて無惨ともいうべき生活をつづけたあげく、今度の重病からようやく起きあがった今でもなお漠然と仏恩というようなものを感じずらしい。



日本文学電子図書館

---

氷を割る

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」

岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行

---



日本文学電子図書館